類型学研究（2019）　*21-47*

日本語空間表現の特徴から

—奄美語を標準文章語と対照させながら—

まつもと ひろたけ

1　はじめに

日本語の空間表現は、時間表現とちがって、述語の特定のかたちによってになわれることはない。つまり、時間表現におけるテンスにあたる形態論的なカテゴリーは、空間表現に関してはでてこない。しかし、述語でない部分であらわす空間表現は、時間表現とともに日本語では名詞によって、名詞の格形式によってになわれる傾向がつよく、副詞はワキ役のようになっている。構文論では一般に時間・空間も、ようす・程度とひとくくりに、文の部分として副詞的な修飾語とか状況（補）語のようによばれたりする。日本語では副詞が主役の、ようす・程度をあらわす修飾語に対して、名詞の格形式があらわしわける時間・空間表現を、文の部分として状況語のように区別するのも（鈴木重幸『日本語文法・形態論』など）、自然のなりゆきである。

日本語（標準文章語）の名詞の格体系をみると、空間表現をになう格形式のなかに、に格、で格のふたつがある。両者はもちろん、空間表現だけを分担しているわけではないが、以下ではふたつの格の空間表現にかかわる用法をとりあげる。

空間表現における標準語のに格、で格のつかいわけにあたるものは、他の諸方言にもみられる。奄美大島北部方言では、標準語に格にあたるかたちが　ナン、ナンジ、で格にあたるかたちが　ナンティと、標準語と音声形式はことなっているが、やはりふたとおりでてくる。このナン（ジ）格、ナンティ格のつかいわけも紹介し、標準語と奄美大島北部方言との用法の異同をかんがえてみる。本報告でとりあげる日本語の空間表現に関して、標準語、方言、さらに古代語もふくめてどのような空間差、時間差がみられるかを検討し、その種の空間表現上の差が、日本語の他のどのような特徴とかかわりあっているのかを展望するてはじめとしたい。

2　に格の空間表現とで格の空間表現

標準文章語で空間表現にかかわる名詞のに格とで格とのちがいに関しては、連語論の観点から、奥田靖雄 1962「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」と奥田 1967「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」に説明がある。「ドコドコにナニナニがある」のような

に格による空間表現を「(ダレダレが) ドコドコでナニカをする」のようなで格による空間表現に対して、奥田「に格」(以下このように略称) はありかのむすびつきとよび、それについて、奥田「に格」では（奥田論文中の符号やゴチック表示の箇所はふつうの表記にしてある)、

> …ありかのむすびつきには空間的なニュアンスがつよくつきまとっているが、対象的なものである。　『日本語文法・連語論（資料編)』283 ページ

と、のべる。それに対してで格のほうは空間的なむすびつきだとするのだが、そこのところを奥田「で格」からひくと、

> に格とで格との機能上のちがいについては、原則的には、で格を空間的であると理解し、に格を対象的と理解することによってはっきりする。空間的なむすびつきにおいては、名詞でしめされるものは動作の成立には直接的に参与せず、その存在の条件をなしているにすぎない。ところが、対象的なむすびつきにおいては、名詞でしめされるものは、動作の成立にとって、必要な客体であって、それなくしては特定の動作が成立しないのである。　『…（資料編)』336 ペ

と説明している。

日本語では、存在空間を対象的なものとしてとらえてに格のかたちで、動作空間を状況的なものとしてとらえて（奥田「に格」では空間的なむすびつきの上位に状況的なむすびつきをおいて、対象的なむすびつきと対立させている。この用語のつかいわけのほうがわかりやすいのでそれを採用しておく)、で格で表現する。おなじ空間表現であっても、デキゴトをとりまく空間、時間的な状況のひとつとして、いわば、外的な空間として、で格がもちいられているとすれば、に格は動詞にとりこまれた、内的な空間である。それを奥田論文で、に格を対象的、で格を状況的（空間的）とよびわけているといえる。文の部分のレベルにいいなおせば、空間的なに格は補語であるのに対して、で格では状況語になるということだろう。

ありかのむすびつきをつくる動詞の代表である存在動詞「ある」も、空間的でない用法を派生させたりしているが、ここでは空間性の名詞のばあいだけをとりあげることにしているので、奥田「に格」のとりだす内在、所有など、ありかのむすびつきの派生的な用法には言及しない。

3　空間表現におけるに格とで格の接近

おなじ空間名詞がきても、に格とで格の空間表現は前者が対象的、後者が状況的と、根本的に性格がことなることを奥田「に格」はのべる一方、このふたつの空間表現が、一定の領域で接近してくることを指摘する。

奥田「に格」には、に格の空間名詞が対象的なむすびつきに属するありかのむすびつきでなく、状況的なむすびつきの下位の空間的なむすびつきとなっている例があがっている。（わかりやすくするため奥田「に格」の例文をさらにちぢめたものもある。）

・…木原は谷松枝のしんだ病院に、米子をだいて、つめたい夜をあかしたのではないか。
・…署内には大勢の巡査がつくえにむかっている。
・…東京のある場末にさかな屋をしているお芳の兄は…
・…丘のうえに、四十メートルの白衣大観音がこちらをながめていた。
・…三吉と直樹とは奥の部屋に洋燈ををかこんで、いっしょによんだり、はなしたりした。
・…ねこがひなたにまあるくなっている。
・…隣室にしごとをしている弟の方へはなしかけながら…。

『…（資料編）』318ペ

この例文をあげるまえの奥田「に格」の説明は以下のとおりである。

空間的なむすびつきをあらわすに格の名詞と動詞とのくみあわせでは、に格の名詞は動作のおこなわれる場所を示している。この場所は、現代日本語では、で格でしめされるのがふつうであり、したがってに格のばあいは文体的なふるくささがつきまとっている。　『…（資料編）』318ペ

上例をみると、擬人的なものもあるが（丘のうえに…）、動詞部分が他動詞か、他動詞でなくても行為的な自動詞が、また継続相以外のかたちなどもえらばれていて、全体として動作空間性をおしだそうとしているといってよさそうである。

そして、うえの例文をあげたあとにつづく奥田「に格」の説明は、つぎのようになっていて、空間＝状況的なむすびつきをあらわすに格と、ありかのに格との連続性に注

意をむけている。

しかし、実際には、この文体的にふるくさいに格とありかのに格との間にはっきりした境界線をひくのは、むずかしい。たとえば、きらめく、ひらめく、ひかる、かがやく、さえる、またたく、うごめく、うごくのような現象性の動詞、音がする、声がする、においがするのような陳述的なくみあわせが、に格を支配するばあいは、そのに格の名詞は現象のありか＝空間をしめしていて、空間とありかとのふたつのカテゴリーを区別する必要がなくなる。いいかえれば、現象のおこった場所をしめすためには、に格も、で格ももちいられて、に格がもちいられる場合、それがで格にかわる文体的なものか、ありかのに格であるか、わからなくなるのである。

『…（資料編）』318～319 ペ

このあとにあがっている例文「空に星がまたたく」「大銀杏のうえに星がひかる」「中天に月が冴える」「廊下に足音がする」のような、現象自動詞やそれにあたるくみあわせ（足音がする）がかざられのばあいは、まえにみた「病院に夜をあかす」…「隣室にしごとをしている」とちがって、で格でないとふるくさいというまでの感じはないだろう。とはいえ、ありかのむすびつきの中核をになう、ある、ないのような動詞、形容詞のばあいとちがって、現象自動詞が、ありか的なに格とならんで、で格名詞をもかざりとしてとるようになっているのも事実である。ここには、現象の生起を存在とのつながりで静的にとらえるか、生起のはらむ過程の面に注目して動的にとらえるかのちがいが、底流としてあるのではないか。

4　存在空間とくっつくところ

奥田「に格」では、存在空間をしめすありかのむすびつきに対立するむすびつきのひとつとして、「くっつきのむすびつき」をとりだしている。このむすびつきについての説明に、つぎの一節がある。

…ゆくさきのむすびつきや存在のむすびつきとはちがって、このむすびつきには空間的なニュアンスがまったくかけている。したがって、かざり名詞の語彙的な意味にも空間的なニュアンスがかけている。　『…（資料編）』295 ペ

このことは、あがっている用例のに格名詞が人体部分や衣服をさししめしている「（夜

風が）ほおにあたる」や「えりに（…手ぬぐいを）かける」をみるとよくわかる。「汽車にのる」のようなノリモノ名詞もモノ的という面でとらえられるだろう。しかし、奥田「に格」にでてくる例文をみると、つぎのようなものもあって、名詞のもつ「空間的なニュアンス」がきれいに消去されるわけではないことをしめしている。

・建一郎はだまって靴をぬぎ、だまって廊下にたった。
・風呂場の洗濯機のかげにちいさくくぐまって、藤子はいきをころした。
・幾子は砂はまにビニールの風呂敷をしいて、腰をおろす。

『…（資料編）』295 ペ

おなじような例を、奥田 1960「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」（「旧を格」と略す）、奥田 1968～72「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（「新を格」と略す）からおぎなっておく。

・一人息子の弘が十一歳をいわうために、さおを庭のすみのところにたてた.（「旧を格」）
『…（資料編）』155 ペ
・…三人はときどき路傍の草のうえに笠をしいた.（「旧を格」）
『…（資料編）』173 ペ
・…つばきやつつじを庭にうえてやったりした.（「新を格」）
『…（資料編）』27 ペ

うえにあげた例も、たとえば、ハリサシニハリヲタテル、シリニザブトンヲシクやハチニウエルなら、かざり名詞の空間性でなくモノ性が前面にでて、くっつき（とりつけ）のむすびつきとしてわかりやすくなる。しかし、例文のようなに格や（洗濯機の）かげ、（草の）うえのように空間化をうけたに格名詞がくっつきのむすびつきにしばしばみられるとしたら、それはここにくわわるかざられ動詞はモノ名詞から空間名詞にまたがるに格名詞をかざりとしていることになる。くっつき自動詞、とりつけ他動詞はなお、空間表現との縁が完全にきれてはいないかのようである。

用例にあったカゲ、ウエやマエ、ソバなどの空間性の形式名詞が実質的な意味をもつ名詞について、名詞の本来のカテゴリカルな意味（意味クラス）を変更することは、奥田「を格」ほかの連語論の実践でも、しばしば、連語のカテゴリーの区分のきめてのひとつとしてあらわれる。を格の名詞と他動詞のくみあわせの、はたらきかけをう

けるモノの空間的な位置変化をあらわすうつしかえのむすびつきの説明で、奥田「新を格」は

…この種の連語のなかに、空間のはたらきをもたせて、まったく空間的な意味をもたない具体名詞を使用しようとすれば、…のまえに、…のうしろへ、…のところから、…のそばまでというように空間化の手つづきをふまなければならない。

『…（資料編）』94 ペ

とのべている。その空間化が、くっつくところをしめすむすびつきでは、うえのようにカテゴリーの区別にきいていない。ここではかざられ動詞が、語彙的な意味をかえて多義性を実現することなく、モノ性の名詞と、空間性の名詞とを、おなじひとつのワク内の対象としている。くっつきのむすびつきは「空間的なニュアンスがまったくかけている」というより、空間的なニュアンスを完全には排除しきっていないのではないか。

このことはまた、奥田「に格」につぎのような指摘となってあらわれる。

くっつけ動詞と移動動詞（いわゆる瞬間動詞）は、状態態のかたち（つく—ついている、くる—きている）をとると、存在動詞の資格をもってきて、に t 格の名詞とのくみあわせにおいて存在のむすびつきをつくる。

『…（資料編）』284 ペ

くっつき動詞（および移動動詞）の存在動詞への移行現象が、アスペクチュアルなかたちをなかだちとしてみられるというのである。くっつき（とりつけ）のむすびつきの空間表現とのよわくないむすびつきがここからもみてとれる。

さらに、奥田「に格」のくっつけ動詞の紹介の一節に

つぎのような動詞は、くっつけ動詞の特殊なグループとしてあつかえばいいだろう。
すむ、いすわる、いつく、とまる、宿泊する、下宿する、留守居する、
居候する、寄寓する、のこる、のこす　『…（資料編）』297 ペ

と説明、表示している箇所がある。これらは持続的、一時的の別はあっても、居住、

滞在、宿泊といえる行動をさししめしていて、に格名詞とのくみあわせにおいては、ごくふつうに、ドコドコにすむ、ドコドコにとまるなど地点、タテモノをしめす空間名詞をとる。うえに引用したところは、そのような空間性のつよい名詞クラスをかざりとするむすびつきを「空間的なニュアンスがかけている」くっつきのむすびつきにくわえるにあたってのことわりのようなものだろう。この種の動詞グループがくっつきのむすびつきをつくる動詞のメンバーになっているところにも、くっつきのむすびつきの空間表現とのつながりがしめされている。

なお、ナノハナに　チョウチョが　とまるはふつうのくっつきのむすびつきだが、が格にノリモノ名詞がくる、クルマが　とまる．フネが　とまる．などの停車、停泊をあらわすトマルも、宿泊のトマルとはちがうものの、に格名詞にふつう空間性の名詞がくるようである。

5　イレル・ダスをめぐって

空間化のありなしがからむ点で、うえにみてきたありかのむすびつきとくっつきのむすびつきとの対立に関連するが、奥田「新を格」と「旧を格」とをみくらべると、とりつけ・とりはずしのむすびつきとうつしかえのむすびつきとを対比した箇所に、動詞ダス、イレルをとりあげてのつぎのような指摘がある。

「旧を格」には、「いれる、だす、あげる、おとす、よせるのようなばしょがえ動詞…」（ばしょがえとは「新を格」のうつしかえのこと）とのべる箇所がある。つづけて

> …単語つくりの要素として、かさね動詞のなかにはいって、そのかさね動詞をばしょがえ動詞のグループにひきずりいれている。たとえば、かつぎいれる、ひきいれる、ほりだす、きりだす…　『…（資料編）』177ペ

のように、単独のイレル、ダスだけでなく、それを要素としてふくむあわせ動詞に関しても、それらがうつしかえ動詞であることを指摘している。

もっとも、うえに引用したてまえには、以下のようにかかれていて、とりつけとうつしかえの対立面だけでなく、さかいめがあいまいになるというかたちであらわれる連続性＝統一面が強調されている。

だが、に格の名詞ととりつけ動詞とのあいだにできている対象的なむすびつきは、ときにはきわめてつよく空間的なニュアンスをおびてくるし、他方では、に格の名詞とばしょがえ動詞とのあいだにできている空間的なむすびつきは、対象的なニュアンスをつよくおびてくるばあいもあって、とりつけとばしょがえとのふたつのカテゴリーのあいだにある境界線はぼやけてくる。とくに、動詞「いれる」をしんにして、できている単語のくみあわせは、この動詞がばしょがえのむすびつきをつくる能力をもっているということを、まえもってしっておらなければどういうむすびつきをいいあらわしているか、判断できないばあいがおおい。たとえば、つぎのような単語のくみあわせ。

143）良太は火鉢に火をおこしたり、やかんに水をいれたりしたが…

『…（資料編）』177 ペ

奥田「新を格」にも、とりつけ・とりはずしとうつしかえのむすびつきとの相関が、おなじように指摘されている。そこにもイレル、ダスを例にだしてのとりつけ以下のカテゴリーの相互関係を強調する。そこでは、イレルをとりつけ、ダスをうつしかえと区別していて、「旧を格」が、イレル、ダスともにうつしかえ動詞にいれているのとちがっている。それをちょっとひねったいいかたにしているところも注目されるが、それは別として、以下引用する。

とりつけ、とりはずし、うつしかえのむすびつき方のちがいが連語の構造のなかに明確にやきつけられているにもかかわらず、これらのカテゴリーのあいだをつなぐ中間的なものがあって、境界をあいまいにする。動詞いれるでつくられる連語のなかには、うつしかえのむすびつきを実現しているようにみえるものがある。例の 107 がそうである。動詞だすでつくられている連語のなかには、とりはずしのむすびつきを実現しているようにみえるものがある。例の 108 がそうである。

107）二人の女はもつれあうように廊下をよろめきながらあるいていったが、須賀を便所にいれたあと…

108）実は自分の財布から金をだして、運賃を人足にわたした。

『…（資料編）』36 ペ

イレルについていえば、財布ニカネヲイレルというとりつけのむすびつきの用法が

原則だというのである。「旧を格」では、おなじイレルのヤカンニミズヲイレルというとりつけの構造を原則的としないでイレルをダスとともにうつしかえ動詞としていたのを「新を格」ではイレルの籍はとりつけ動詞へとうつされ、あつかいがま逆になっている。このような事実の説明は、「を格」新版のものがわかりやすいので、うえにつづく段落も以下引用しておく。分類のむずかしさをもカテゴリー間の連続性のあらわれにむすびつけるところがてほんになる。

> 動詞いれるには、とりつけのむすびつきをつくる能力があり、動詞だすにはうつしかえのむすびつきをつくる能力があるといえるのは、一般的な傾向としてであり、いちいちの連語についてはそれほどはっきりとした判断がくだせるものではない。こうした事実は、うつしかえととりつけとの、うつしかえととりはずしとの、ふたつのカテゴリーの連続性をあきらかにしてくれる。　『…（資料編）』36ペ

イレル、ダスのばあい、個々の動詞項目をめぐって、カテゴリー間の連続性がみとめられるといえるが、これが個別的な動詞項目でなく、一定の動詞グループのかたちをとってあらわれると、奥田「に格」が「くっつけ動詞の特殊なグループ」としてあつかう、スム、トマル、下宿スルなどの動詞群になるのだろう。これらにみられる動詞項目をカテゴリーへと所属させることのむずかしさが、研究主体のちから不足によるものでなく、研究対象である連語自体に内在するものであるとみて、それをカテゴリー間の連続性のあらわれととらえることはまったくただしい。

6　ゆくさきのむすびつきのこと

に格名詞と移動動詞のくみわせが、現代語とちがって、古代語ではゆくさきのむすびつきでなく、到着点のむすびつきをになっていたといわれることは、いままでにみてきたありかのむすびつき、くっつきのむすびつきのに格とのかかわりあいのなかに、このむすびつきをくわえようとするばあい、「ゆくさきのむすびつき」という以上に好都合だといえる。ゆくさきや方向が到着点までのプロセスに重点がおかれるのとちがって、到着点とは、移動動作がおわったとき以後の存在空間といえるからである。移動動詞には空間的な移動動作の方向性がしめされているとしても、に格名詞＋移動動詞の出発点的な用法は、へ格名詞＋移動動詞とちがって、に格名詞はゆくさき＝方向でなく、到着点という一種のありかをさししめしていたのだろう。現代語のに格名詞＋移動動詞からなるゆくさきのむすびつきは、方向と到着点とを厳密に区別しないで、

ゆくさきとしてくくっている。奥田「に格」にも、方向と到着点という区別はない。

7　に格の用法の出発点

奥田「に格」は、うえにみてきた存在（ありか）のむすびつき、ゆくさきのむすびつき、くっつきのむすびつきの三種のむすびつきをまとめるかたちで、つぎのような位置づけをあたえている。

> くっつきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせは、ゆくさきのむすびつき、存在のむすびつきをあらわす単語のくみあわせとともに、に格の名詞と動詞とのくみあわせのなかでもっとも具体的なものであって、ほかのむすびつきをあらわす単語のくみあわせとの関係において、歴史的な出発点をなしている。
>
> 『…（資料編）』297～298 ペ

この説明におぎないをつけたせば、ゆくさきのむすびつきといわれるものが、ふるくは移動の方向をしめすばあいと、到着点をしめすばあいとでわかれていて、に格の空間名詞と移動動詞とのくみあわせが、方向でなく到着点のほうをしめしていた。そのことをかんがえると、みっつのむすびつきの連係は、さらにつよいものになってくるだろう。

くっつきのむすびつきにあらわれるくっつくところは、到着点といえないが、付着点、あるいは定着点ではある。到着点や付着点は「点」といっても、そして広狭の差はあっても、物理的には一定のひろがりをもつ空間である。このような言語外の現実も、に格の三用法のちかさをささえている。

そして、くっつくうごきの結果や移動動作の結果、モノやヒトは付着点、到着点に位置をしめる、つまり「ある」ことになる。くっつき動詞、移動動詞は「ある」こと、つまり存在にいたるプロセスをあらわしわけることを本務としながら、存在をも含意している。これに対して、日本語の動詞アル、イルは純粋に存在そのものをさししめしている。モノのありようとしての存在は、究極では運動ときりはなすことができないであろうが、存在というのはその運動の面をきりすてて、事物のありようを静的にとらえている。日本語は運動の場としての動的な空間をあらわすで格に対して、静的な存在空間はに格であらわすという区別をあたえていて、両者を区別しないいきかたはとっていない。

8　矢藤節子「に格の名詞と動詞とのくみあわせ—平安時代における—」をめぐって

表題の矢藤 2005（1964）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ—平安時代における—」は執筆時期は 1964 年で、奥田 1962（1983）をうけて、奥田の「積極的な指導」のもとにかかれたものであることが、鈴木康之 2006「矢藤節子のニ格の研究について」に紹介されているので、公刊年とともに、執筆年もあげておくが、以下執筆年でしめすことにする。矢藤 1964 は副題のとおり、古代日本語のに格名詞をあつかっている。奥田の指導の存在とともに、その点でも、とりあげなくてはならない論文であり、小論からみて注目すべき記述がみられる。

まず、くっつきのむすびつきと「存在のむすびつきや内在のむすびつきやゆくさきのむすびつき」との相互関係について、

> ここにある相互関係とは、このくっつきのむすびつきを表わす単語のくみあわせを中心点として、そこから、池の波紋の如く、存在や内在やゆくさきなどのむすびつきで表わす単語のくみあわせが広がっていくというものである。このような現象は、奥田氏の「このくっつきのむすびつきを表わす単語のくみあわせは、ほかのむすびつきをあらわす単語のくみあわせとの関係において、歴史的な出発点をなしている。」ということばを、まさにうらづけるものであろう。
>
> 『対照言語学研究』15,　56 ペ

とのべる箇所をとりあげる。ここからは、奥田「に格」のくっつきのむすびつきと、存在のむすびつき、ゆくさきのむすびつきとの、に格の名詞と動詞のくみあわせの出発点としての同等性はでてこない。そのこともあってか引用のなかのカッコ内の奥田「に格」にあたる文章から、その点にふれる「ゆくさきのむすびつき、存在のむすびつきをあらわす単語とともに」の部分がはぶかれている。こうみてくると、小論は矢藤「に格」のうえの指摘を、奥田「に格」をもとに再確認したものだったといえそうである。

上記のことに関連するが、奥田「に格」は、くっつきのむすびつきに関して、「このむすびつきには空間的なニュアンスがまったくかけている。したがって、かざり名詞の語彙的な意味にも空間的なニュアンスがかけている。」（『…（資料編）』295 ペ）とのべるのに、矢藤の「くっつきのむすびつき」の節の総論的な部分にはそのような断言はみられない。むしろ、矢藤「に格」のくっつきのむすびつきの下位区分の各所に

・…くみあわさるに格の名詞が空間的であることから…—うう（ウエル）、しく、すう（スエル）などとのくみあわせ
・…に格の名詞が空間化という積極的な手続きをとっているから…—～のうへに(をく、しく）～のもとに（すう）など
・…存在のむすびつきに近いものであり、もう、存在のむすびつきを表わす単語のくみあわせに移行されてしまっている…—上例でかざられ動詞が～たりの「状態体」をとっている
・…空間的ニュアンスを持った具体的なに格の名詞とくみあわさっているものも多い。—いへにい(入)る、くらにこめて、火のなかにうちくべて、など

『対照…』15,　53～56 ペ

のような指摘がなされている。矢藤「に格」がくっつきのむすびつきを、奥田「に格」とちがってに格名詞の空間性を無視せず、それをとりこんで説明しようとしていることがわかる。小論はこの点を矢藤「に格」より積極的にのべようとした。

くっつきのむすびつきの空間性との連関が、現代語と古代語でちがっていたということもあるだろうが、奥田「に格」などから小論でひろいだしたように、現代語でもそれは用例にあげることができる程度にのこっている。だとすれば、矢藤「に格」がくっつきのむすびつきに、かざり名詞の空間性をなかだちとする存在性がみられることを指摘するのは、古代語だけでなく、現代日本語に関しても、必要なことだろう。そのことは別として、古代語のほうにくっつきのむすびつきの空間＝存在性がヨリめだつとしても､それはくっつきのむすびつきがに格の用法の出発点であるというのに、かえって有利な条件になっている。

ゆくさきのむすびつきに関して、矢藤は「に格」は、「ゆくさき（空間的な到着点・方向)」と、ゆくさきの内容を具体的に注記している。しかし、ゆくさきのむすびつきの用例のならべかたが、到着点と方向と下位区分されているようなことはない。

小論でもふれたように、名詞の格の用法をとりあげるとき、に格が到着点を、へ格が方向をあらわすという区別が、古代語はもちろん、現代日本語に関してもきかれることがある。に格の用法をかんがえるさい、この区別のあったほうがぐあいがいいのではないかということものべたが、矢藤「に格」は、ゆくさきのむすびつきについて、へ格とに格の対照まではふみこんでいない。

連語論のたちばから、ゆくさきのに格、へ格のつかいわけを再点検するとしたら、

移動動詞とひとくくりにされるかざられ動詞の語彙的、文法的なちがいの確認がかかせないだろう。移動動詞の語彙的な意味や文法面で移動的か到着的かや、状態的、結果的か不完成的かなど、ゆくさきの方向性、着点性にからんでくる事実を確認したい。

さきにふれたように、鈴木「矢藤…」によれば、矢藤「に格」には「奥田靖雄の積極的な指導」がはいっているようである。奥田から同様に積極的な指導をうけたことのある小論の筆者の体験では、そのようなばあい、論文には、奥田のとらえかたがかなりの程度うつしだされることになる。だとすれば、くっつきのむすびつきの、ありか、ゆくさきのむすびつきより出発点的なところへの位置づけ、ゆくさきのむすびつきに関して方向と到着点との区別を志向するなどは、奥田の見解に、すくなくとも対立するものではないだろう。

なお、鈴木「矢藤…」には、奥田「に格」はその後奥田自身によるてなおしがされていたが、その原稿が紛失していること、それに関連して、矢藤「に格」には、そのてなおしが反映している可能性があることをのべているが、小論ではこの点にはたちいらない。

9　奄美大島北部方言の空間表現

松本 1998「格のカテゴリーの内部構造—奄美方言の〈空間格〉をめぐって—」は奄美大島北部方言（龍郷町瀬留）の、空間的なで格、に格にあたる格形式のつかいわけに関する説明がのっている。

空間的なで格にあたるこの方言のかたちはナンティ、に格にあたるかたちはナン、ナンジである。標準日本語のニ、デの関係と同様、ここでもニにあたるありか的なナンが出発点となって、ニテのような複合形ナンティが生じたとみられる。ただし、ありか的なナン形も、おなじありか的なナンジという複合形を、かわり語形としてもっているところが、標準日本語とちがっている。アルにあたる存在動詞アンとのくみあわせにもナンジ形をつかうことができるが、ナン形のほうがふつうのようである。

ナンの出自はあきらかでないが、ナンティが〜ナン　ヲゥティ（〜にいて）のようなくみあわせから発しているとすれば、ダレカガ　ドコドコニ　イテ　〜スルのようなシテの行為のばしょをしめす動作空間の意味からの文法化をかんがえやすいかもしれない。だとすればナンジは〜ナン　イジ（〜にいって）へとさかのぼらせそうだが、イクにあたるこの方言の移動動詞イキュンは、現代方言ではふつうナン格名詞とはくみあわさらない。また意味的にもドコドコへイッテがなぜドコドコデでなくドコドコニという存在空間をあらわすようになるかどうかにも問題がのこるのではないか。

なお、この方言では文章語のに格、で格とちがって、それぞれ空間的な用法と非空間的な用法とが表現面で区別される。つまりありかをしめす空間的なナン格とヒト名詞をかたちづけてあいてをしめすンジ格とが、同様に動作空間をしめす空間的なナン格とモノ名詞をとって道具，手段などをしめすシ格（以前はと格にあたるトゥ格）とが分化している。この点に関する検討はここではおこなわない。

10　ナン格と動詞アンとのくみあわせ

奄美大島北部方言の空間名詞のナン格は、アン（ある）、ヲゥン（いる）、ネェン（ない）をカザラレとするくみあわせでありかのむすびつきをつくる。

・アン　ヤマンシャナン　サタヤドリヌ　アン. あの　やまかげに　砂糖小屋が　ある.
・カサンヌ　ソンヤクバヤ　ハキナナンドゥ　アン. 笠利の　村役場は　赤木名にある.
・イキミチナン　ハブヌ　ヲゥタン. いくみちに　ハブが　いた.
・メェナン　ヲゥン　ヲゥナグヤ　キョラムン　ジャヤー. まえに　いる　女性は美人だね.
・クゥガシャン　ネィカンヤ　ヤマトナン　ネェンダロ. このような　ミカンは　本土に　ないだろう.
・ワキャ　ヤーナン　ネェン　ムンヤ　トーマァヌ　ツィノダキェ　ジャ. わしらの　うちに　ないものは　唐うまの　つのだけだ.

ナンのかわり語形といえるナンジ形も、ありか表現の中核であるうえのようなくみあわせの、カザリ部分にあらわれることがある。

・ウマナンジ　ヲゥンヤ　アンニャ. そこに　おのは　あるか.

デキゴト、事件のばあいでもナン格でいいが、標準語の傾向と同様のナンティ格もみられる。

・ダーボテナン　クゥジヌ　アタンカイ. どのあたりに　火事が　あったのかな.
・フンチャビラナンティ　コォゼェレェヌ　アタン. 本茶ざかで　やまくずれが

あった.

11　ヒト、イキモノのありか

この方言でもモノでなく、ヒト、イキモノに関してその存在空間をナン格でさしだす例のほうがよくみられる。存在動詞でいえば、アン　あるでなく、ヲゥン　いるにおきかえられる。この種のナン格のでる例のうち、まず、当のデキゴトがはなしてのメノマエに実景としてあるばあいからあげる。訳文は直訳的にナン格に対応するに格をそのままいかして～に、～にいてとしておく。標準語的にはやはり、～で、だろう。

・ハテェナン　トグェフリ　シュン　チュヤ　タルヨ. はたけにいて　とうぐわをふっている　人は　だれかね.
・クゥマナン　ナマシバリ　シャンヤ　タルヨ. ここに　あたらしい　小便を　したのは　だれよ.
・クゥマナン　ムェンガ　シュールィヨ. ここにいて　おりこうに　していろよ.
・トー、クィンシャヤ　スィダカンカナ　クゥマナンジ　ユフディ　イコ. さあ、木のしたは　すずしいから、ここに　やすんでいこう.
・クゥマナン　ユルイ　シヤ　ヲゥララン. ここに　ゆっくりしては　いられない.
・ウガシャン　イバリナン　ミシャーリ　ネィブラレェンニャ. そんなせまいところに　三人　ねられるか.

上例では指示語の使用とか命令文とかたずね文にみられる特徴がメノマエ性をささえているようだ。

以下の例はメノマエでなくてもいいが、個別的なデキゴトである。

・サイバンヌ　カドナン　マッチュルィ. 裁判所の　かどに　まってろ.
・サブロヤ　ヤーナン　ネィフトゥン. 三郎は　いえに　ねている.
・サブロヤ　ミチナンジ　ナシュット. 三郎は　みちに　ないているよ.
・サブロトゥ　ミチナン　イキャユンカモ　ワカラン. 三郎と　みちにいきあうかも　しれない.

つぎの例もメノマエでさししめしながらでもいいが、文脈のなかだけでもいえる。

・ワラブェ　アリン　アマナンジ　アスィビュティ．こどものころ　あそこにいて　あそびよった．

もっとも、うえのような、メノマエの実景とか個別的なデキゴトにかぎられるわけではない。最初の例のようにメノマエでなくても、また一般的なこととしていうときでもいえる。

・サブロヤ　ヤマトナン　キーシタァムン　ナトゥン．三郎は　本土で　たいしたものに　なっている．
・サンドサンドヌ　ミシヤ　トゴラナン　カミュン．三度三度の　めしは　だいどころにいて　たべる．
・フーニンテェヌ　メェーナン　ィエーサツィ　スィルィチ　イャールィバ　タルアティン　ノボセスィキンヨ．おお人数の　まえに　あいさつしろと　いわれれば　だれで　あっても　のぼせあがるよ．

イキモノ名詞がくる例もあげておく。やはり存在空間的な面に注目していて、メノマエの実景でも（まえの例）、そうでなくてもいえる（さいごの例）。

・ウミナン　カモヌ　ウシュリ．うみに　かもが　ういている．
・ユカ（ン）シャナン　インヌ　クゥー　ナシャン．ゆかしたに　いぬが　子を　うんだ．
・カムィヤ　ウミンスクゥナン　ネィブリュン．かめは　うみのそこに　ねむる．

12　モノのありか

奥田「に格」の空間的なむすびつきは、ヒトやイキモノのかかわる空間（ありかのばあいならイルでしめされるほう）をあらわす例があがっているが、この方言のナン格はヒト、イキモノ以外のかかわる空間（ありか的な）であってもいい。

・ミチナン　ジャマ　ナトゥン　イシヤ　ハマチ　クンクェラシュクィ．みちに　じゃまに　なっている　いしは　はまへ　けころがしておけ．
・ジドシャヌ　ヤマミチナン　コショ　シャン．自動車が　やまみちに　故障した．

これらの例もいしがみちにあること、自動車がやまみちにあることをしめす面を、本務としてかふくみとしてかは別として、もっているようである。その点で動作空間という面より存在空間的な面が前面にでて、文体差には解消しにくい。

また、うえの例のいし、自動車は文においては主語あるいは主語的（主体）だが、直接補語（賓語）でしめすモノのありかをしめすナン格もある。

・ミチナン　カネ　ニェッケタ．みちに　かねを　みつけた．
・ムラヌ　クヮシヤナン　イッセンシ　タァーツィヌ　クルアムィバ　ウトゥン．むらの　菓子やに　一銭で　ふたつの　くろあめを　うっている．
・タタンヤ　ストゥニワナン　フスィ．たたみは　そとにわに　ほせ．

これらも、みちにかねがあること、菓子やにくろあめがあること、たたみがそとにわにあることを意味構造のうえではしめす点で、ありか的といえ、まえにあげた例とかわらない。

13　その他のありか

出現物のありかや現象のありかといえるものにも、ありかをしめすナン格がでてくる。この種のむすびつきは、標準文章語でもに格がでてきやすい。

・アシブヤ　ヤクバヌ　メェヌ　シューヒリナン　ガバ　メェトゥタン．あしはやくばの　まえの　しおひがたに　たくさん　はえていた．
・ナガレブネィヌ　ナハナン　ヒンシニ　シュタンチド．ながれただようふねのなかに　変死していたそうだよ．
・スィトゥ　クショシ　シケィンナン　ユムィナヌ　タ（ッ）チュン．しゅうとを虐待して　世間に　よめとしてのわるいうわさが　たつ．

14　くっつくところ

ナン格は空間名詞をかたちづけるのが基本だが、モノ名詞であってもイレモノ性のあるばあいは別のモノをいれる空間＝ありかとしてはたらく。

・ハチナン　ハナ　ウィルィ．はちに　はなを　うえろ．
・ブンナン　ネィカン　モティナ．盆に　みかんを　もったか．

・タムトゥナン　ジン　イルィティ　アックナヨ．たもとに　ぜにを　いれて　あるくなよ．

つぎのフーナベェナンおおなべには、フーナベェシおおなべでとなれば道具的だが、ナン格ならうえと同様、イレモノ的だろう。

・ウァネムンヤ　フーナベェナン　タキュン．ぶたの　えさは　おおなべに　たく．

ひろがり性をもつモノ名詞も、そのひろがり—空間性でナン格になり、イレモノ的なありかをしめすことができる。人体部分もひろがりがあるから、ここにくわわる（カオナンの例）。標準語でもに格が可能である。

・ウン　フルシキナン　ベェント　ツィンムィ．その　ふろしきに　弁当を　つつめ．
・スズリナン　スィミ　スィティナ．すずりに　すみを　すったか．
・サブロチバ　カオナン　スィミ　ヌリタグティ　ヲゥドゥトゥリ．三郎ったら　かおに　すみを　ぬりたくって　おどっている．

奥田「に格」にてらせば、これらは「くっつきのむすびつき」にくわわる例である。そして、そのあつかいでいいといえるが、いま、方言のナン格をみるにあたって、その意味の用法を存在空間のさししめしからたどっていくと、ここでもありかとくっつくところ、ありかのむすびつきとくっつきのむすびつきの連続性が、目にはいってくることに気づかされる。

15　空間表現の空間差と時間差

空間表現の領域をうけもつ奄美大島北部方言のナン格、ナンティ格のつかいわけと標準文章語のに格、で格のつかいわけとはおおきくみれば平行していて、ふたつの言語体系が縁つづきであることを十分うかがわせるが、まったく同一とはいえない面がある。

そのなかでもおおきなちがいとみられるのが、存在動詞や現象動詞以外の動詞とくみあわさるナン格のつかいかたが、おなじくみあわせにあらわれる標準語のに格よりも活発といえることである。活発とは具体的には標準語よりも多様な動詞項目とくみ

あわさってつかわれることである。おなじくみあわせが標準語でははなしことばにない、かきことばに少数みられるものとして、「文体的なふるくささがつきまとっている」（奥田「に格」318 ペ）のに対して、この方言のナン格のこの種のくみあわせを、文体のちがいに解消することはできない。ナン格は存現動詞（所動詞という用語のことはあとでみる）以外とくみあわさったばあいも、文法的なレベルでのありか的な意味を維持している。これらのナン格は状況的（空間的）なむすびつきをつくるナンティ格のバリアントではなくて、なお、本来のナン格に固有の対象的なありかのむすびつきを構成している。

標準語の状況的（空間的）なむすびつきにあらわれるに格に、で格にくらべて「文体的なふるくささ」がみられることからは、状況的なむすびつきにに格がつかわれるとしても、それはで格以前のふるいかたちであるという、時間差をとりだすことができる。

そのことはまた、に格、ナン格とで格、ナンティ格とくらべあわせたとき、形態論的なつくりの順序にもあらわれている。方言のほうで、ナン格になんらかの要素がよりそい、融合してナンティ格ができていることはつくりから簡単にみてとれる。に格とで格のばあいも、で格がにて形からの音声変化によって成立したのだから、事情はおなじである。に格とで格、ナン格とナンティ格という、格形式そのものにも、成立の時間差があることになる。

こうして、に格とで格、また、ナン格とナンティ格が文や連語のなかになんらかのせりあい関係をとりつつあらわれているときいえることは、に格やナン格がで格やナンティ格よりもふるいという、かたちの時間差である。

また、奄美大島北部方言と標準語とをくらべたとき、存在、現象をあらわす以外の動詞グループとのくみあわせで、なお、ナン格のありか性を維持している方言のほうが、おなじ動詞グループとのくみあわせのに格を、状況的なで格の文体的なバリアントにしてしまっている標準語より、古層をたもっているということもいっていい。方言のほうが格形式の文法的な意味の対立が明確だからである。

本報告でとりあげてきたこの方言のナン格は、非存現動詞とのくみあわせにおいて、予想されるように、ナンティ格へとおきかえることができる。そのとき、むすびつきの意味はナン格の存在空間でなく、動作空間をさししめすようになる。ここにみられるナン格からナンティ格への移行は、標準語において、状況的なに格が文体的にふるくさいものになって、それにかわってで格が浸透することとおなじく、方言自体の内的な変化が根本にあるとかんがえられる。標準語と方言という、同系の言語体系間の

類似は、変化の方向をもつらぬいていておかしくないからである。しかし、その変化をさらに加速させているものがあるとすれば、そこには「バイリンガル」のはなしてがもちこむ標準語からの直接の影響があるだろう。存在表現の中核をになう動詞アンが、もよおしや事件をあらわすとき、ドコドコナンティ…といえるのなど、標準語のドコドコでナニナニがある、にしりおしされている面もちいさくなさそうだ。ナン格と存現動詞以外の動詞とのくみあわせについてたずねたとき、方言のはなしてにときにみられるとまどい（ナンは標準語のに格かで格かとまよう）のみなもとに、標準語に格、で格と方言ナン格、ナンティ格のあいだの意味のギャップのようなものもあるのではないか。

16　空間表現の連語にあらわれるかざりの優位

いまみてきたような奄美語の空間表現におけるナン格とナンティ格の対立は、どちらもおなじく空間名詞をかたちづけていながら、前者は存在空間、後者は動作空間というふうに、むすびつきの意味がことなっている。ここにみられる対立は、おなじく空間名詞をかたちづける古代日本語のに格とへ格が、前者は到着点、後者は移動の方向をさししめすのと平行しているとはいえないだろうか。空間表現をめぐって、古代語にみられる特徴が、到着点—方向の対立から存在空間—動作空間へとずれてはいるが、現代奄美語にみとめられるのだとすれば、これも奄美語の古風さのあらわれのひとつと、とらえることができるかもしれない。

そして、空間名詞というおなじひとつのカテゴリーに関して、奄美語も古代日本語もここでは、かざり名詞とかざられ動詞との関係をみると、ナン格とナンティ格、あるいはに格とへ格という、かざり名詞の格のかたちのちがいによって、動詞とのくみあわせの意味＝内容面（むすびつき）がきめられているかのようである。

原則として、連語はくみあわせのかざられのほうが「しん」（４、５に引用した奥田「旧を格」の用語、なお、『日本語文法・連語論（資料編）』の「編集にあたって」にもみえる）になってむすびつきの性格が規定される。古代語のに格とへ格の対立においても、むすびつきが到着点をさししめすか移動の方向をさししめすかの選択は、かざられが一定であるなら、かざりの格のかたちによって規定されている。つまり、むすびつきの性格に関して、全面的にとまではいえないが、かざりにも決定権があることになる。奄美語の存在空間をしめすナン格と動作空間をしめすナンティ格のあいだにも、おなじ事情がみられる。

ふつうには、文法的なかたちづけの確立しない時期が、カテゴリカルな意味にたよ

らざるをえないとみられるが、一方では、連語にあらわれるようなかざり—かざられの従属的なむすびつきも、はじめからあったわけでなく、単語と単語との語彙＝文法的な関係の歴史的な発展のなかで、しだいにそれらしきものになってきたのではないか。かざられの優位が確定するまえの段階の存在ということをかんがえれば、かざりのがわの決定権のことも、というより、かざり—かざられの対立が明確になっていないことも、言語古層のあらわれかもしれないという点もふくめて、検討する必要がある。

17　空間表現のに格・ナン格と所動詞文

存在空間という静的なに格名詞をとる動詞の中核は存在動詞である。存在というのは事物を運動のすがたでとらえていない点で状態に属する。これにさらに現象のありかをしめすに格がくわわる。現象は存在とちがって、一定の状態だけでなく、その状態の出現・発生や消滅というプロセスも加算されることになるが、全体として状態的である。小稿でもつかったが、「存現動詞」という動詞グループのとりだしとなづけは、出発点は中国語文法のものであろう。存現動詞をつらぬく状態性から、このグループは状態動詞 stative verb といっていい。存在空間のに格には、存在動詞を中核として、この状態動詞のグループとくみあわさる傾向がある。これに対して運動・動作をあらわす動詞は、その内容面に連動して、動作空間をあらわすで格とくみあわさりやすい。

ところが、奄美大島北部方言にみられたように、動作をしめすのが本務の動詞が、存在空間をあらわすこの方言のナン格とくみあわさって、そのまま存在空間のむすびつきをつくってしまうことがある。だとすれば、ここでは動作動詞が本来の動作空間をとるむすびつきになっていない。つまり、動作動詞が動作動詞としての性格を十分に発揮していなくて、かえって対立する存現動詞（状態動詞）とおなじふるまいをしめしている。そうなるとこの方言では、状態動詞と動作動詞の対立はそれほどはっきりしたものではないことになる。

ここで、動作動詞と状態動詞の対立を能動詞 active verb と所動詞 stative verb (inactive verb)といいかえると、あつかっていることがいくらか深刻にみえてくるような気がする。内容類型学的な問題とのからみがあきらかにでてくるからである。存在空間表現とのつながりの点で、奄美大島北部方言では、能動詞がまったき能動詞としてはたらいておらず、なお所動詞性をとどめている。能動詞文と所動詞文の対立をみるとき、存在表現に関して、この方言では標準語よりも所動詞文的なあつかいが大

事にされている。ここでは、ヒトの active な行為も、シゴトとしてでなくデキゴトとしてとらえられる。そうするとデキゴトのありかとしての存在表現があてがわれることになり、所動詞文にくわわってしまう。

標準文章語で所動詞とくみあわさる空間的なに格名詞が、動作空間をしめすで格の文体的なバリアントになっているのとちがって、奄美大島北部方言では、空間的なナン格名詞は、文法的な意味のレベルでしっかり動作空間をしめすナンティ格と対立していた。文体的なちがいよりも文法的なちがいのほうが、より内容面のちがいをうつしだしている。そのような文法的なレベルにおいて、所動詞とだけでなく、能動詞ともナン格がくみあわさって、存在空間的な意味をもちつづけていることは、日本語の名詞のに格の用法をたどろうとするとき、示唆するものがあるようにおもわれる。奄美大島北部方言のナン格空間名詞が、能動詞とのくみあわせのほうにまではみだしていることは、琉球語の内容面の古層のあらわれであるだけでなく、それとおなじはみだし現象が古代日本語のに格のばあいにもかんがえられるのではないか。

つまり、古代日本語のに格も、空間名詞のくみあわせで、所動詞となら存在空間、能動詞なら動作空間というような区別はとらず、奄美大島北部方言のナン格と同様、能動詞とのくみあわせであっても、存在空間的な意味をたもっていることがかんがえられる。このようにみることができるとすれば、古代日本語もに格に存在空間と動作空間の意味が未分化にこめられているというより、所動詞文的にとらえる存在空間のに格だったとすることができるのではないか。で格の前身であるにて格はすでに万葉集から用例がみえるようだが、その使用がに格にくらべてすくなかった時期、さらに、に格より後発のにて格がまだ成立しなかった時代も、に格が動作空間の意味をも兼務していたのではなくて、デキゴト全体を能動詞文的にでなく、所動詞文的に静的な存在の状態の面をてらしだしてとらえていたと推察される。

能動詞文と所動詞文の対立と、後者の衰退傾向は、現代日本語もつづいていて、すでに三上章の諸著などに指摘されている。本報告のに格、ナン格の用法にもその傾向があらわれているといえる。

なお、ここでほりさげることはできないが、奄美語にみたように、存在空間をさししめすナン格のあらわれる文につきまといがちな、松本 1996「奄美大島北部方言のメノマエ性」ほかのいう「メノマエ性」も、存在空間表現の位置づけと無縁とはいえない。モノや現象の存在に気づくのは、ハナシテがとりまく環境のなかからデキゴトをとりだして、それをその場で確認することである（「確認」というとモーダルな面が強調されるから、「あるがままにみとめる」のようないいかたが適切かもしれない。もち

ろん、そこから強調的な意味へと展開するわけだが)。つまり、メノマエ性は、発達した言語表現に一般的な、空間、時間に関してばめんに制約されることのない言語表現としてでなく、独立語文、一語文的な段階からあまりへだたらない言語表現としてあらわれる。存在空間をあらわすに格はまさにその存在空間をさししめすことによって、このようなメノマエ性表現に、つよくむすびついているといっていい。

18　非カテゴリカルな意味

ありかのむすびつきとくっつきのむすびつきとを区別するのは、に格名詞に空間性があるかないかである。しかし、さきにみたように、くっつきのむすびつきには、に格名詞が空間化をうけているものや、かざられのくっつき動詞がモノ名詞とともに空間名詞をとるもの、またかざられ動詞のなかの特殊グループとして、空間名詞とくみあわさりやすいものがあるのをみてきた。これらのことは、くっつきのむすびつきが、に格のモノ名詞をかざりとしながらも、なお、空間名詞を完全に排除しきっていないことをしめしている。「ものほしざおに　あかとんぼが　とまる」からの「ものほしざおの　さきに　あかとんぼが　とまる」はモノ名詞が空間化をうけているとはいえ、それが、名詞のカテゴリゼーションの変更（奥田 1974「単語をめぐって」ほかの用語でいえばカテゴリカルな意味の変更）にひびいてきていないとすれば、「えせ空間化」（松本 1979「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ」）ということになる。

こうみてくると、くっつきのむすびつきは、に格のかざり名詞の空間性のありなしにまったく無関心とか、空間性とモノ性が未分化とまではいえないが、それほど気にしないところが、いまでものこっているようにみえる。この傾向は、原初の出発点的なくっつきのむすびつきではもっと顕著な性格だったのではないか。それに対して、ありかのむすびつきは、その成立後の用法の拡大のなかで、空間名詞からモノ名詞、ヒト名詞へとかざり名詞の意味クラスをひろげている。そして、内在や所属、所有のむすびつきへと、名詞の意味クラスにしたがってむすびつきを分化させている。

日本語の存在表現がアリ・ヲリに特化し、移動表現がイク・ク（ル）ほかにやはり特化したとき、そのような特化をうけなかったグループがくっつき動詞なのであろう。奥田「に格」のいうように、くっつきのむすびつきが、ありかのむすびつき、ゆくさきのむすびつきとともに、に格をかざりとするくみあわせで「歴史的な出発点」として統一されるとしても、このような対立点を指摘することができそうである。矢藤「に格」の奥田「に格」からの引用に、ありか、ゆくさきがはぶかれているのは、矢藤のかきもらしとはいえない。

くっつきのむすびつきのように、かざられ動詞が、カテゴリカルな意味としてはたらきうるレベルのかざり名詞の区別を活用していないのは、なにを意味するか。くっつきのむすびつきは、ありか、ゆくさきのむすびつきのように意味的に特化していない。また、かざりのカテゴリカルな意味のちがいに無関心で、それが多義性の実現にはたらいていない。これは、かざられ動詞の意味グループとして十分に特化していて、かざり名詞のカテゴリカルな意味にも敏感に反応する、ありか、ゆくさきのむすびつきと比較して、それらよりさらに出発点的とはいえないだろうか。

文法現象が、とりわけ形態論的なてつづきによって、外形＝表現面に明示されているばあいは、それとしてとらえやすいが、カテゴリカルな意味によってしめされるレベルの文法現象はとらえにくいし、他と区別するのがむずかしい。「かくれた文法」（カツネリソン，Ｓ．Ｄ.）という用語＝とらえかたもその辺をふまえてのことだろう。カテゴリカルな意味は、かくれた文法の解明にあたって重要な役わりを演じているようである。

しかし、カテゴリカルな意味は文法現象とむすびついたとき、はじめてカテゴリカルな意味としてはたらいてくる。そうでないばあいには単に語彙的な意味のレベルでの一般化であったり、語彙的な意味のワクの変更であったりして、文法とかかわることはない。空間化が、カテゴリカルな意味の変更としてはたらくのは、それをうけとめる文法的なわくぐみがあるばあいである。

うえにみてきたくっつきのむすびつきにみられる空間性は、むすびつきを他のむすびつきへと変更するものではない。この点で、カテゴリカルな意味のレベルにはくわわらない意味特徴といえる。

カテゴリカルな意味は、日本語研究にあっては、奥田「新を格」にいたる連語記述の実践のなかでとりだされたものである。それは連語の内容面（むすびつき）の解明にかかすことができない。さらにアスペクトの記述においても、連語のばあいと同様、カテゴリカルな意味へのめくばりが成果をもたらしている。

しかし、カテゴリカルな意味を、文法記述に際して、万病にきく特効薬であるかのようにとりたてることはできない。くどうひろし 2013「動作様態へ」に「非陳述的な形態論　連語論の分野に顕著にみられる〈カテゴリカルな意味〉」といっているところでは、まだはっきりしないが、「陳述的な構文論」が「それにふさわしい記述方法がとられていない」とつづけ、「いつまでも連語論　アスペクト論の方法の応用にとどまっている」ことを指摘するのは、はじめの「カテゴリカルな意味」への言及が、その射程に範囲、限界があることを念頭においた発言であったことがあきらかである。

小論では、ある領域ではカテゴリカルな意味としてきいている意味特徴が、別の領域になるとそれとしてはたらかないということを、連語を例にとりあげた。連語のワク内にとどまっているところが工藤「動作様態へ」とちがうが、工藤にならって、カテゴリカルな意味の文法記述における効用のことをかんがえてみた。

19　文の部分としてのありかのに格、ナン格　—おわりに—

２でのべたように、に格の存在空間表現と、で格の動作空間表現を、文のレベルで、具体的には文の部分としてとらえると、おなじひとつのものとみることはできない。日本語の文の部分の分類は、連用修飾語の範囲をかぎりなくひろげようとしているかにみえる国文法は論外として、高橋太郎ほか 2005『日本語の文法』のように、文中でへ格、から格、を格、さらにに格の空間名詞からなる「ウゴキがかかわる場所」を、対象とさししめす一般の補語（対象語、目的語 object）とともに、補語のメンバーにくわえている。松本 2005「品詞と文の部分」はそれをうけるかたちで、直接補語に対立する間接補語のひとつに、空間補語をたてた。

日本語では、他動詞がうごきの対象をさししめすを格名詞とくみあわさるように、移動（自）動詞は移動する空間、移動の出発点、ゆくさき、到達点などをしめすを格、から格、へ格、まで格の空間名詞とくみあわさる。これらの格のかたちの名詞と移動動詞とのあいだには連語論的には対象＝空間的なむすびつきがなりたっているが、それが文のレベルに格あげされると、空間補語となってあらわれる。

に格の空間名詞と存在動詞や現象動詞などのあいだにも、同様な対象＝空間的なむすびつきが成立していて、文のレベルではそれはやはり空間補語となる。

一方、空間をあらわすで格名詞は、他動詞とくみあわさるを格名詞、移動動詞とくみあわさるを格、から格、へ格、まで格名詞、移動動詞とくみあわさるに格の空間名詞とちがって、動詞によるしばりをうけない。それは動詞の領域をはみでて、形容詞述語文や名詞述語文にもあらわれ、動作空間という制約からはなれて、状態のなりたつ空間を指し示すこともある。「三郎は学校ではおとなしい。」とか奄美語で「サブロヤ　トーキョナンティヤ　クヮイシャヌ　シャチョドー（三郎は東京では会社の社長だよ)。」のように。こうして、で格やナンティ格の空間名詞は、できごとやありさまをとりまく状況をしめして、状況語というよびなにふさわしいものとなる。

動作や状態の空間をさししめすで格名詞が補語でなく状況語に属する以上、それは、クリモフ 1977『新しい言語類型学　活格構造言語とは何か』ほかにてらせば、活格タイプ言語では「近い補語」でなく「遠い補語」に対応するだろう。一方、存在空間の

に格は（空間）補語であることから、それは動作・状態空間ので格と区別して「近い補語」に対応させることができる。ところで、クリモフ『新しい言語類型学…』につぎの指摘がある。

> 活格言語に可能な補語の性質によっても、活格言語の文の二つの基本文型が区別される。活格構文には近い補語も遠い補語もあり得るのに対して、不活格構文には遠い補語だけが見られるすぎない。　（石田訳『新しい言語類型学…』98 ペ）

存在文、存現文、あるいは三上章の動詞分類にあわせてよべば、所動詞文は、その中心において不活格構文とかさなる。だとすれば、存在＝所動詞文には「遠い補語」しかあらわれないことになる。しかし、そこにみられる存在空間をさししめす名詞部分は動作＝状態空間の名詞部分にくらべて、状況語的でなく補語的である。つまり、不活格構文のがわにも「近い補語」的な空間補語が、いまの日本語や奄美語にみとめられることなる。

さきに、日本語、奄美語の存在空間的なに格、ナン格に対して、動作空間的なで格、ナンティ格の後発性ということをのべた。そのことをふまえれば、すくなくとも空間表現において、「近い補語」と「遠い補語」は、でだしから完璧に対立していたものでなかったという面があるのではないか。活格構文と不活格構文の動詞部分の対立と同様、名詞部分の対立にもしだいに明確になっていったとしたら、それらはどちらも、活格構文と不活格構文の対立を強化することにはたらいて、言語の活格タイプ制度の確立をたすけることになっただろう。

このようにみることができるとすれば、日本語、奄美語において、格の表現面で存在空間と動作空間を区別することは、内容類型学的にもかなり古風な面の残存ということになりそうだが、「近い補語」「遠い補語」の理解の点もふくめて、さらに検討していきたい。

参考文献

海山文化研究所編 2005『対照言語学研究』15(矢藤 1964 をおさめる)
奥田靖雄 1985『ことばの研究・序説』（むぎ書房）（奥田 1974 を）
くどう ひろし 2013「動作様態へ」（白馬日本語研究会　未公刊）
クリモフ，ゲ・ア 1977、石田修一訳 1999『新しい言語類型学　活格構造言語とは何か』三省堂

言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房（奥田 1960、1962, 1967, 1968～72 を）
鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房
鈴木泰、角田太作編 1996『日本語文法の諸問題』ひつじ書房（松本 1996 を）
鈴木康之 2006「矢藤節子のニ格の研究について」(未公刊)
高橋太郎ほか 2005『日本語の文法』ひつじ書房
仁田義雄編 1998『日本語の格をめぐって』くろしお出版（松本 1998 を）
松本泰丈 1998「格のカテゴリーの内部構造—奄美方言の〈空間格〉をめぐって—」(『国文学解釈と鑑賞』800 号至文堂)
——— 2006『連語論と統語論』至文堂（松本 1979 を）

（追記）小論は 2015 年 10 月 17 日から 18 日に中国瀋陽航天大学で開催された第 2 回中・日・韓比較文化研究国際文化シンポジウムでの発表に手をくわえ、全昌煥、陳多友主編 2016《中・日・韓比較文化研究　第二届中・日・韓比較文化研究国際学術検討会大会論文》遼寧人民出版社に発表したものに、さらに加筆・訂正をほどこしたものである。